

大学生における異性関係スキル

豊田弘司
(奈良教育大学心理学教室)

Heterosocial skills in undergraduates

Hiroshi TOYOTA
(Department of Psychology, Nara University of Education)

要旨：本研究の目的は、大学生における異性関係スキルが、異性の友人数と自己判断による異性からの好意度に及ぼす影響を検討することであった。611名の大学生に、異性関係スキルを調べる尺度の各項目について6段階で評定を求めた。因子分析の結果、男子学生では「会話スキル」及び「対人不安」、女子学生では「会話スキル」、「対人不安」及び「対人関係の自信」という因子が抽出された。重回帰分析による検討の結果、男子学生においては「会話スキル」と「対人不安」が異性からの好意度を21%、女子学生においては「会話スキル」、「対人不安」及び「対人関係の自信」が異性からの好意度の24%を予測することが示された。また、異性からの好意度の高群と低群の比較を行ったところ、両群間に差が認められる項目が明らかになり、異性からの主観的好意度の高い人と低い人に行動の違いのあることが明らかになった。

キーワード：異性関係スキルheterosocial skill、会話スキルconversational skill、対人不安anxiety for human relations

1. はじめに

他者から好意をもたれることは、人間が生活に適応していく上で重要な課題であるが、他人からの好意度を規定する要因については、多くの研究が行われてきた。Walster, Aronson, Abrabams, & Rottmann (1966) では、実際のダンスパーティーにおいてダンスパートナーとなった相手に対する好意度は、相手のもつ外見的魅力によって規定されることが明らかにされ、外見的魅力の重要性が示されている。また、他者から好まれる特性も指摘されている。Anderson (1968) は、555の性格を表す形容詞を用いて「誠実さ」や「正直さ」といった性格特性が好まれることを示している。さらに、Zimbardo, Pilkonis, & Norwood (1975) では、シャイネス（はずかしがり）が他者からの好意度を低下させる可能性が示唆されている。我国においても、豊田 (1998, 1999) は「男性から嫌われる男性」「女性から嫌われる男性」「女性から嫌われる女性」及び「男性から嫌われる女性」、豊田 (2000) は、「男性から好かれる男性」「女性から好かれる男性」「女性から好かれる女性」及び「男性から好かれる女性」の特徴、豊田 (2004) は「異性から好かれる人」

及び「同性から好かれる人」の特徴を示している。そして、対象が同性と異性では、好かれる特徴や嫌われる特徴が異なることが明らかにされている。

ただし、好かれる特徴や嫌われる特徴を明らかにするだけでは実際の生活において貢献する程度は少ない。好かれるためには、嫌われないためにはどのような行動をすればよいのかを示すことが必要である。特に、異性から好かれるためには、どのように行動すべきであるのかという点についての検討は重要である。というのは、思春期にあたる中学生時代の青年期前期、高校時代の青年期中期、そして、青年期後期にあたる大学生時代においても恋愛関係は関心の中心であり、恋愛関係によって精神的に不安定になる可能性が高いからである。それ故、好かれるための行動という問題を検討する意義は大きいといえよう。

では、異性から好かれるための行動特徴については、どのように検討されてきたのであろうか。従来の研究をみると、異性から好かれる行動特徴については、異性関係スキル (heterosocial skill) の研究として位置づけられてきた。Galassi & Galassi (1979) によれば、異性関係スキルとは「異性との社会的、性的関係をつくり、それを維持し、終結するために必要な行動」と

定義されている。Barlow, Abel, Blanchard, Bristow, & Young (1977) は、声の質、会話の運び方、表情、視線などの男性に関する具体的な異性関係スキルを示している。そして、また、Conger & Farrell (1981) は、Barlow et al. (1977) の明らかにした異性関係スキルを評定項目として、実際に観察者が被観察者のスキルの程度を評定した結果、発話時間、凝視、自己接触の少なさなどが観察者のスキル評定と正の相関を示すことを明らかにしている。すなわち、発話時間が長く、相手を見つめる回数が多く、自己接触が少ないほど異性関係スキルが高いと見なされやすいことになる。

我が国においても数は少ないが興味深い研究が行われている。中村 (1991) は、恋愛関係が順調であると自認している者においては、相手との関係を育てようとする行動や対話が多く、反対に順調でないと自認している者は、相手との関係を破壊するような行動が多いことを見いだしている。また、堀毛 (1987) は、男子学生と女子学生のスキルと恋人の有無の関連性を検討し、恋人のいる男子学生はいない男子学生に比べて、「リラックス・挑発」といったスキル、恋人のいる女子学生では、いない女子学生に比べて、「積極性」というスキルが熟達していることを示している。

このように、恋人のいる人といない人では、異性関係スキルの違いがあり、非言語行動や会話の運び方などの対人行動が、異性の好意度を規定する重要な要因であることが示唆される。ただし、これらの行動間の関連性については言及されていないし、個々の対人行動がどの程度異性からの好意度に関係しているかについても明らかにされていない。

そこで、本研究では、従来の研究で明らかになってきた異性関係スキルに関する項目に対する評定値を因子分析し、異性関係スキルを構成する因子を抽出する。そして、抽出された因子ごとの得点と、被調査者自身が異性から好意を寄せられているという評定値（異性からの主観的好意度）との関係を分析し、どのようなスキルが異性からの好意度と関係があるのかを明らかにすることが、本研究の目的である。

2. 方法

2. 1. 被調査者

被調査者は私立大学の大学生611名（男226名、女385名）であった。これらの大学生の平均年齢は、18歳8か月であった。

2. 2. 材料

2. 2. 1. 異性からの社会的スキル尺度

本研究で用いられた尺度は、20の評定項目からなっており、それらは上述の文献から異性からの好意を得るためのスキル、行動もしくは特性として適切である

ことが明らかにされているものを選択した。その際、性差があることを想定し、男女に偏りのないようにした。具体的な項目は、表1に示されている。これらの20項目に対する評定尺度については、「非常にあてはまる（評定値は3、以下同様）」「かなりあてはまる（2）」「ややあてはまる（1）」「あまりあてはまらない（0）」の4段階評定尺度が用いられた。

2. 2. 2. 異性からの好意度評定尺度

異性からの好意度を測定するために、「異性の友人数」「異性からの主観的な好意度」に関する評定尺度を作成した。「異性の友人数」については、「とても多い（3）」「かなり多い（2）」「少しはいる（1）」「全くいない（0）」、「異性からの主観的な好意度」については、「とても好かれる（3）」「かなり好かれる（2）」「やや好かれる（1）」「全く好かれない（0）」という4段階評定尺度が用いられた。

上記スキル尺度及び異性からの好意度評定尺度は、性別及び年齢を記入する欄とともにA5判の用紙に印刷された。

2. 3. 手続

調査は、被調査者の所属する大学の一室において、講義中に集団的に実施された。

2. 3. 1. 異性からの社会的スキル尺度評定

被調査者に上述の用紙を配布され、性別及び年齢を記入した。次に、調査者が上述のスキル尺度の項目に対する評定の仕方について説明した。被調査者は、各項目について、あてはまる程度を4段階で評定していた。評定の時間は5～8分間を要した。

2. 3. 2. 異性からの好意度評定

調査者は異性からの好意度評定について説明した。そして、被調査者は「異性の友人数」及び「異性からの主観的な好意度」に該当する評定値を記入した。およその評定時間は2～3分であった。全員が終了したことを確認した後、調査がすべて終了したことを被調査者に伝え、調査用紙をすべて回収した。

3. 結果

調査用紙をチェックし、性別、年齢及び評定尺度の各項目に対する評定値に記入漏れのない被調査者のデータのみを分析の対象とした。

3. 1. 異性関係スキルの因子構造

異性からの社会的スキル尺度の評定値に対して、男子学生と女子学生ごとに主成分分析を行って因子数を推定した後、男子学生については2因子、女子学生については3因子に因子数を設定して、主因子法による因子分析を行い、その後バリマックス回転を施した。その結果、複数の因子に負荷量が重複する項目が認められたので、これらの項目を削除し、改めて同様の因子分析を行った。その結果が、表1（男子学生）及び

表1 異性関係スキル尺度に関する因子分析 (男子学生)

評定項目	因子1	因子2	M	SD
会話スキル ($\alpha = .73$)				
日常的なことをおもしろく表現できる	.75	-.03	1.33	1.06
話題が豊富である	.74	-.18	1.12	.98
異性との会話では自分がしゃべる方が多い	.57	-.13	.95	.95
相手のしぐさをすぐにまねることができる	.55	.08	.98	1.04
異性のよい点を素直に言葉にできる	.41	-.21	1.42	1.00
対人不安 ($\alpha = .61$)				
異性に話しかけるとときには勇気がいる	-.22	.68	1.46	1.03
異性の目を見ると恥ずかしい	-.19	.64	1.16	.93
人から嫌われるのではないかと不安がある	.04	.53	1.56	1.03
知らないうちに自分の手や顔などを触るくせがある	.07	.38	1.46	1.09

表2 異性関係スキル尺度に関する因子分析 (女子学生)

評定項目	因子1	因子2	因子3	M	SD
会話スキル ($\alpha = .73$)					
話題が豊富である	.72	-.06	-.32	1.00	.94
日常的なことをおもしろく表現できる	.71	-.01	-.32	1.26	.98
異性との会話では自分がしゃべる方が多い	.56	-.07	-.17	.83	.86
自分がしゃべるより相手の話を聞く方が好きだ	.52	.11	.10	1.25	.93
対人不安 ($\alpha = .63$)					
異性の目を見ると恥ずかしい	-.09	.68	.01	.94	.91
異性に話しかけるとときには勇気がいる	-.24	.67	-.02	1.11	.92
人から嫌われるのではないかと不安がある	.04	.51	.01	1.75	.98
対人関係の自信 ($\alpha = .54$)					
自分の笑顔に自信を持っている	.06	.19	.55	.85	.96
自分の能力に自信がある	.14	-.09	.54	1.01	.92
異性をすぐ好きになる	.07	.11	.46	.79	.92
異性の名前を覚えるのは得意である	.10	.09	.38	.66	.84

表2 (女子学生) に示されている。男子学生については、第1因子を「会話スキル」(寄与率20%)、第2因子を「対人不安」(同15%)と命名した。一方、女子学生は、第1因子を「会話スキル」(同15%)、第2因子を「対人不安」(同11%)、第3因子を「対人関係の自信」(同11%)と命名した。

3. 2. スキルと異性からの好意度との関係

異性関係スキルと異性からの好意度の関係を調べるために、スキルを原因、異性からの好意度を結果と仮定して、重回帰モデルの分析を行うことにした。具体的には、男子学生と女子学生それぞれに上記の因子分析で明らかになった因子ごとの合計点を説明変数、異性の友人評定値と異性からの主観的好意度評定値を加算した値を目的変数とする重回帰分析を行った。

男子学生では「会話スキル」の標準化偏回帰係数が.45 ($t=7.70, p<.01$)、「対人不安」の標準化偏回帰係数が-.15 ($t=2.56, p<.05$)で有意であり、重相関係数は.49、自由度調整済の定係数は.24であった ($F=38.03, p<.01$)。したがって、「会話スキルの高さ」と「対人不安の低さ」が異性からの好意度を予測できる可能性があることになる。

また、女子学生では「会話スキル」の標準化偏回帰

係数が.16 ($t=3.39, p<.01$)、「対人不安」の標準化偏回帰係数が-.26 ($t=5.99, p<.01$)、「対人関係の自信」の標準化偏回帰係数が.37 ($t=8.05, p<.01$)でそれぞれ有意であり、重相関係数は.53、自由度調整済決定係数は.28であった ($F=51.80, p<.01$)。したがって、「会話スキルの高さ」、「対人不安の低さ」及び「対人関係の自信の高さ」が異性からの好意度を予測できる可能性が示された。

3. 3. 異性からの好意度の高群と低群の比較

異性関係スキルと異性からの好意度の関係を詳細に調べるために、男子学生と女子学生それぞれの、異性の友人数及び異性からの主観的好意度の評定値の合計点が0~1点の者を低群、4~6点の者を高群として抽出し、因子分析をする以前のすべてのスキル尺度の項目ごとにt検定による群差を検討した。その結果が表3 (男子学生) と表4 (女子学生) に示されている。

4. 考 察

本研究の目的は、異性関係スキルの因子と異性からの好意度の関係を検討し、どのようなスキルが異性からの好意を得るために最も貢献しているのかを明らか

表3 異性からの主観的好意度の高群と低群間の比較 (男子学生)

評定項目	高群		低群		差	t 値
	M	SD	M	SD		
異性との出会いの機会がない	0.90	0.76	2.12	0.97	-1.22	-2.45 **
日常的なことをおもしろく表現できる	2.14	0.78	1.00	1.15	1.14	2.18 **
話題が豊富である	1.86	1.01	0.64	0.81	1.22	2.92 **
異性の言葉に表情豊かに反応することが少ない	0.45	0.67	1.28	0.96	-0.83	-1.84 *
異性をすぐ好きになる	2.03	0.96	0.94	0.99	1.09	1.76 *
異性に話しかけるときには勇気がある	0.72	0.98	2.14	0.77	-1.42	-2.29 *

* p<.05, ** p<.01

表4 異性からの主観的好意度の高群と低群間の比較 (女子学生)

評定項目	高群		低群		差	t 値
	M	SD	M	SD		
異性に話しかけるときには勇気がある	0.32	0.47	1.49	1.04	-1.17	-3.89 **
異性の言葉に表情豊かに反応することが少ない	0.18	0.30	0.78	0.81	-0.61	-2.50 **
自分の能力に自信がある	1.79	0.96	0.68	0.83	1.11	2.38 **
異性の良い点を素直に言葉にできる	2.39	0.72	1.46	0.96	0.93	2.35 **
自分の笑顔に自信を持っている	1.75	1.24	0.35	0.70	1.40	2.26 **
日常的なことをおもしろく表現できる	2.07	0.96	0.96	0.89	1.11	2.25 **
異性との出会いの機会がない	0.79	1.05	1.96	1.03	-1.17	-2.15 **
話題が豊富である	1.75	0.99	0.71	0.82	1.04	2.07 **

** p<.01

にすることであった。

男子学生では異性からの好意度を規定するのは「会話スキル」及び「対人不安」であった。すなわち、会話スキルの高い者ほど、「対人不安」が低い者ほど、異性（女性）から好意を受けていると感じていることが明らかになったのである。本人が感じている異性からの好意度と、実際に異性から好意を抱かれているかどうかは必ずしも対応していない。しかし、この両者の間には少なからず関係があり、それを考慮すると、男子学生においては「会話スキル」を反映した行動、および「対人不安」を感じさせない行動が異性からの好意を喚起する要因となることが示唆される。会話の進め方の重要性については、Barlow et al. (1977) においても指摘されているが、異性とのコミュニケーションの中心的役割を果たす会話の重要性が本研究においても追証されたといえよう。また、堀毛 (1987) は、男子学生のスキルにおいて異性からの好意と関連性が高いのは「リラックス・挑発」というスキルであることを示したが、本研究における「会話スキルの高さ」と「対人不安の低さ」は、「リラックス・挑発」を分割した内容であると考えられる。さらに、Zimbardo, et al. (1975) は、シャイネス（はずかりがり）の程度が高いと異性からの好意度を低めることを指摘しているが、これも本研究の「対人不安の低さ」が異性からの好意度を高めるといふ結果と一致した結果であるといえよう。

一方、女子学生においては、「会話スキル」「対人不安」及び「対人関係への自信」が異性からの好意度に関連することが示された。堀毛 (1987) では、女性においては「積極性」が異性からの好意度に影響する要因であることが示されていたが、本研究では新たに、「会話スキルの高さ」「対人不安の低さ」及び「対人関係の自信の高さ」が異性からの好意に影響することが示されたのである。ただし、堀毛 (1987) の指摘した「積極性」の内容を吟味すると、本研究の「会話スキル」及び「対人関係の自信」を含めた内容である可能性も指摘できる。

さらに、項目ごとの分析では、男子学生において「異性との出会いの機会がない」と考える者が、異性からの好意度低群に多かった。被調査者が所属する大学は男女共学であり、異性と接触する機会は得ることは可能であり、客観的に出会いの機会が少ないとは考えにくい。したがって、そこには、対人関係への意欲の低下が反映されているのかもしれない。また、「異性の言葉に表情豊かに反応することが少ない」と考える者が低群において多かった。この結果は、低群が、異性との関係に限らず、社会的スキル (social skills) における「反応性」に問題があることを表している。ここでいう社会的スキルの定義は、数多く提出されているが、堀毛 (1990) によれば、社会的スキルの行動面と能力面のいずれを強調するかによって定義が分かれる。行動面を強調する定義としては、「相互作用を

する人びとの目的を実現するために効果のある社会的行動」(Argyle, 1981) 等があり、能力面を強調する定義としては、「特定の社会的課題を有能に遂行することを可能にする特定の能力」(McFall, 1982) 等がある。定義はどうあれ、社会的スキルの中で重要なのが、相手の話を聴くことである。Smith (1986) は、コミュニケーションの総時間のおよそ45%が聴くことに費やされていることに言及している。また、相手の話を聴くことは、相手に対して社会的報酬を提供していることになり、それが相手に安心感や自尊心の向上をもたらすと考えられている(相川, 2000)。したがって、相手の言動に対する「反応性」は重要な社会的スキルの次元であり、「異性の言葉に表情豊かに反応することが少ない」ということは、異性からの好意を獲得する可能性が低下するといえよう。ただし、Barlow et al. (1977) によれば、あまりにも過度に表情豊かに反応しすぎるのは適切ではないことが指摘されている。したがって、適度な反応性が確保されていることが大切であるといえる。

一方、女子学生では、「異性との出会いの機会がない」および「異性の言葉に表情豊かに反応することが少ない」といった項目が異性からの好意度との関係のあることが示された。これらは男子学生と同じ結果であり、異性関係に対する関心や意欲の低下、社会的スキルにおける「反応性」の問題が、異性からの好意を得るために男女共通して重要な問題であるといえよう。

また、「異性のよい点を素直に言葉にできる」という項目については、高群が低群よりも評定値が高かった。この項目は、「会話スキル」に近いニュアンスをもっている。因子分析ではこの項目は「会話スキル」因子に含まれなかったが、ここでも女子学生においては「会話スキル」が異性の好意を規定する力の大きいことがうかがえる。また、教育心理学的な視点にたてば、ほめ方の原則として、一般的に「即座に」「具体的に」という点が重要であると指摘されている(豊田, 2003)。「即座に」「具体的に」ほめるという行動は、まさに、「異性のよい点を素直に言葉にできる」という行動と共通するものであるといえよう。

5. 引用文献

相川 充 2000 「人づきあいの技術－社会的スキルの心理学－」サイエンス社

Anderson, N. H. 1968 Likableness Rating of 555 Personality-Trait Words. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 272-279.

Argyle, M. 1981 Social competence and mental health. In M. Argyle (Ed.), *Social Skills and Health*.

Methnen. Pp.158-187. (相川, 2000による)

Barlow, D. H., Abel, G. G., Blanchard, E. B., Brisow, A. R., & Young, L. D. 1977 A heterosocial behavior checklist for males. *Behavior Therapy*, 8, 299-239.

Conger, J. C., & Farrel, A. D. 1981 Behavioral components of heterosocial skills. *Behavior Therapy*, 12, 41-55.

Galassi, J. P., & Galassi, M. D. 1979 Modification of heterosocial skills deficits. In A. S. Bellack & M. Hersen (eds.) *Research and practice in social skill training*. Plenum, N. Y.

堀毛一也 1989 デート場面における社会的スキル 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 139-140.

堀毛一也 1990 社会的スキルの習得 斎藤耕二・菊池章夫(編著) 社会化の心理学ハンドブッカー 人間形成と社会と文化 川島書店 Pp.79-100.

McFall, R. M. 1982 A review and reformulation of the concept of social skills. *Behavioral Assessment*, 4, 1-33.

中村雅彦 1991 大学生の異性関係における愛情と関係評価の規定因に関する研究 実験社会心理学研究, 31, 132-146.

Smith, V. 1986 Listening. In O. Hagie (Ed.) *A handbook of communication skills*. Croom Helm/New York University Press. (相川, 2000による)

豊田弘司 1998 大学生における嫌われる男性及び女性の特徴 奈良教育大学教育研究所紀要, 34, 121-127.

豊田弘司 1999 大学生における嫌われる特徴の分析 奈良教育大学教育研究所紀要, 35, 71-75.

豊田弘司 2000 大学生における好かれる男性及び女性の特徴 奈良教育大学教育研究所紀要, 36, 73-76.

豊田弘司 2003 「教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－」 小林出版

豊田弘司 2004 大学生における好かれる男性及び女性の特徴－評定尺度による検討－ 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 13, 1-6.

Walstar, E., Aronson, V., Abrabams, D., & Rottmann, L. 1966 Importance of physical attractiveness in Sating Behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 508-516.

Zimbardo, P. G., Pilkonis, P. A., & Norwood, R.M. 1975 The social disease called shyness. *Psychology Today*, 8, 68-72.

付記

本研究のデータ分析には、平成14年度奈良教育大学学校教育教員養成課程、教育・発達基礎コース、心理学履修分野卒業の吉本有希さんの協力を得た。記して感謝の意を表します。